

II-1-5 保健体育科

(1) 研究仮説

ア ボール型・ネット型の競技に対して、個々が感じているルールや競技性の違和感やそれぞれの競技を難しくしている原因を考察・解決する事で「問う力」の必須要素である観察力・思考力が育まれるだろう。

イ 本研究では「競技力向上」を目的とはせず、本来の競技ルールにプラス α で手を加えることによって誰もが競技力・身体能力にハンデを感じる事なく、皆が平等に競技を楽しむ方法を考察するのが目的となっている。よって、本時の考察活動を経験することで世の中に潜む不平等や置き去りに気づける広い視野と気づきの姿勢を身につけることができるだろう。

(2) 実践

ア 実施時期 令和3年6月から令和3年12月末まで

イ 実施場所 1年F組教室 体育館

ウ 参加生徒 1年E・F組女子(20人×2クラス)

エ 行程・実施内容

①4月よりサッカー、卓球、持久走、バドミントン、バスケの実技授業を行う。

②教室にて各競技を行い、感じた違和感や困難だと感じた点をGoogleドキュメントのスプレッドシートでグループごとに共同編集を行い、意見を出し合う。

③存在する競技に+ α でルールに手を加え、体格・体力差などでハンデを感じる事なく皆が平等に楽しめるにはどうしたら良いかグループ単位で議論する。

④各グループで考えた特別ルールをGoogleスライドで発表する。

⑤Googleフォームを使用して授業の感想・各グループの評価を回答してもらい、一番評価の高かった発表の内容を実技で実践し、皆で体験する。



スライドを用いた発表会



生徒が作成したスライド

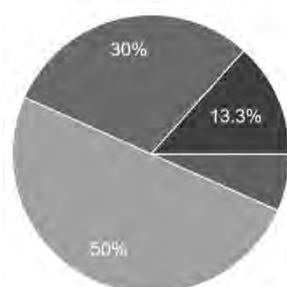


オリジナル競技の実践

(3) 評価

ア アンケート

③ この授業(企画)によって、「あって欲しい...を、これまでよりも考えるようになりそうですか？」



- 1 考えなくなりそう
- 2 変わらなそう
- 3 少し考えるようになりそう
- 4 考えるようになりそう
- 5 とても考えるようになりそう

(1...0%、2...6.7%、3...50%、4...30%、5...13.3%)

イ 参加生徒の感想（一部抜粋）

- ・既存のシステムの疑うことなく実践しているのでこういった授業があると考える力が深まりそうだった。誰でも楽しめる易しいスポーツが考えられて純粋に面白そうだった。一方でそれぞれの体格を生かしたプレーなどが公平性の追求によって淘汰されてしまいそうだと感じた。
- ・客観的に、様々なそれぞれの違う立場になって考えるのが難しかったが、新たな視点の授業で新鮮味があって興味深く、楽しい時間だった。
- ・なぜその競技に楽しさを感じるのか、どのくらいルールを変更したらいいのかなどたくさん考えたことで「問う力」の必要性を強く感じさせられた。

ウ 考察

近年の ICT 化により現代の社会は情報が溢れており、日常から疑問を抱いて物事に対し深く問う事が困難になっていることが危惧されている。

今回、本校の SSH のテーマが「あってほしいのに無いことに気づく力」ということだったので、特に洞察力・気づきの力を引き出すことに重点を置いて、生徒が自ら考え深い学びを求めて授業に取り組めるよう、グループ活動を中心にアクティブラーニング型授業を積極的に取り入れることを重視して授業を展開した。

参加生徒の感想にもあったように、決められた競技を枠の中で実施するのではなく、考えて作り上げる今回の研究授業スタイルは「あって欲しいこと」をこれまでよりもよく考えるきっかけとなったのではないだろうか。授業の中でできない他人の気持ちを考え、理解することで視野を広げ、多様性を学ぶことは体育の授業だけに限らず、日々の生活の中でも非常に重要なことであると感じられるので引き続き問いを投げかける授業を展開していきたい。

エ 今後の課題（次年度に向けて）

- （ア）参加生徒はまだ1年生なので、あと2年間段階を踏んでこれからも計画的に指導していきたい。
- （イ）運動強度や消費カロリーなど、身体活動が自らの身体にどう影響を与えるのか、体育的理論と科学的根拠に基づいた STEAM 教育等の横断的構想ができれば問いが更に深まっていくのではないかと感じた。